神様と師匠

龍の花嫁　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18389148

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻, 本番無し, 女装(白無垢), 嘔吐

相談所vs神様５話目です。女装で茶道で華道で嘔吐です。お好きな方はお楽しみください。

Table of Contents

龍の花嫁　5

タイムリミットまで、あと４日。

朝早くから芹沢はエクボと連れ立ってやしろに向かう。時間が惜しかった。古語で書かれた『調味暦』を読むのは時間がかかる。時間外労働はよろしくないと霊幻は渋ったが、そんなこと言ってる場合じゃないでしょう、と芹沢は怒鳴り返してしまった。芹沢は元々命をかえりみない節のある霊幻が、今回の件でとうとう命を諦めたような気がして、焦っていた。
身を守れる超能力持ちの自分達と違って、霊をはらうことしかできない霊幻は、芹沢からしたら儚い存在だ。守らなくては、と焦るが、神様に超能力を向けるのは危険すぎて下調べ無しにはできない。芹沢は本当に、焦っていた。はやく神様の弱点や儀式の不成立条件を調べなければ、と。
圧倒的な力を持つ日本の神々だが、いくつかの縛りがある、とエクボは芹沢に教えてくれた。一つ、全知全能ではない。こちらに超能力者が揃っているという事実を知らない。いざとなれば、知り合いの能力者たちを全員集めて、霊幻を神の加護から力づくで引き離すこともできる、とエクボは言う。ただし、その場合霊幻の『何か』は持って行かれて失い、今まで通りの霊幻ではなくなる可能性はある、とも。
「手や足とか身体なら良いが、喜怒哀楽を持って行かれたり、意志を持って行かれると、ほぼ廃人だな」
それではダメだ、と芹沢はかぶりをふる。
「じゃあもう一つ。日本の神々は儀式を重要視する。ほぼ呪いだがな、言祝ぎ（ことほぎ、寿ぎ）だから祝福だ。簡単にははらえねぇぞ。その儀式が完璧であるほど神の力は強くなる。霊幻は生来の悪運の強さで儀式を不完全なものにしてきてる。が、本気で神隠しをしてこられたら、人間なんてひとたまりもねぇ。とはいえ、神様はいまのところ花嫁という形式にこだわってる。おそらく最初のBSS

（※僕が先に好きだったのに・シチュエーションのこと）生け贄を娶った結果力が増したから、同じようにしたいんだろ。霊幻にうんと言わせたいはずだ。だからモブの姿まで使ってる」
「よく霊幻さんは結婚を断れるよね。あんなにベタ惚れなのに。神様からの洗脳にも勝ってるなんて」
「……霊幻はシゲオと結婚する気はねぇからな」
「そうなの？付き合ったらもうあの２人はゴールインするものだと思ってた」
「霊幻はシゲオが飽きるのを待ってる。人生経験の差だろうな、高校生の性欲を満たしてやって、付き合ったらできること全部やらしてやって、そしたら……それ以外のものに目がいくようになることを知ってやがる」
「それ以外って？」
「子供……新しい家族とか、世間体とか、他の異性とか、結婚で得られるステータスとか、仕事とか、学問とか、まぁ、恋愛以外のそういう輝かしいものだな」
「ふぅん。俺にはよく分からないな」
「……そりゃお前引きこもりだったからだろ」
「失礼な悪霊だな……俺だって結婚とかは考えたことあるよ。だからこそ、もし俺が霊幻さんと付き合うことになったら、死ぬまで……いや下手したら死後も、絶対にその手を離さないと思うけどな」
「なんだァ？意外とロマンチストなんだな」
「いや、現実的なだけだよ。さっきエクボくんが言ったことは全部希望的観測ってやつだ。霊幻さんと別れた後、他の好きな人と結ばれる保証は？その人が結婚してくれる保証は？子供ができない夫婦がどれだけいるか知ってる？仕事が上手くいく保証は？学問で成功する保証は？それこそ……それまで俺が生きてる保証はあるの？」
「それは……」
「目の前に確かに居て、俺を愛してくれる霊幻さんと、そんな不確かな未来の希望を天秤にかけて、少なくとも俺は未来を選ぶ気にはなれないなぁ。俺だっていつ『こう』なるかは分からないのに、今の幸せを手放すことはできない」

バシュウ。２人に襲いかかろうとしていた悪霊を芹沢は祓う。
「エクボは分かるはずだよ。能力者はいつ悪霊に、化け物になるか分からない。確かなものは今しかないんだ。そして……そんな能力者を心から愛してくれる人が現れて、ましてやそれが両想いなら……絶対に逃しちゃいけないと思う」
「……なるほどな。それが超能力者の世界ってやつか」
「普通だと思うけど」
「お前らにとっちゃ、な」
「どちらにせよ、別れ話をちゃんとしないのは霊幻さん良くないと思うなぁ。自然消滅すると思い込んでるなんて、逆の方向に自分に自信を持ちすぎだよ……」
チャイムを鳴らして日本家屋に入る。
書斎に入って、『調味暦』を手に取ろうとして。
「やられた……」
芹沢は唸った。無くなっている。場所を変えられただけかもしれないが、とにかく、上有の一族の妨害に遭っていた。
「また探し出すところからだ」
イライラしながら芹沢はまた本棚の左上から順に古書を取り出してはしまっていく。
昨日もいっそ本を持って帰ろうとしたが、エクボに「神社の石を持って帰るな」とたしなめられてやめていた。神域のものを持って帰るのは、お守りとかそのためのもの以外は、神のモノに手を付けたと祟られかねないのである。
「……あれ、これって昨日は見逃してたけど……」
『荒潮社誌』と書かれた本が芹沢の手にあった。
おそらくこの神社の歴史書である。昨日も見た気がするが、この神社の御神体の荒潮川の名前を知らなかったので、気にせず流してしまったものだ。
慌てて開く。
「字が汚い……」
「馬鹿、崩し字だろ。だが読むのに時間がかかるのは確かだ。延暦２年……このあたりは昨日と同じ内容だな。ええと……」
エクボと芹沢は１ページずつ慎重に文字を拾っていく。

最初に川に身を投げた村長の娘の慰霊のために、最初は小さな祠が作られたこと。
それからも何度も洪水が起こり、荒潮川をまつる神社が祠に併設されたこと。
それでも３００年ごとに大規模な氾濫が起こったので、そのたびに恋人のいる娘を選んで生け贄にしてきたこと。
しだいに娘ばかり生まれる一族、上有家がそのまつり手を担うようになったこと。そのかわりに上有家は村を挙げて保護したこと。
夕方までかかってそこまで読み解いた時に霊幻から電話がかかってきて、思わず芹沢は舌打ちした。
また明日になれば、この本を探し出すところからしなければならない。
「いい所なのに……！」
「……なぁ芹沢。俺様ちょっと気になってることがあるんだが。明日はそれを探しに行かねぇか？」
「気になってること？」
「生け贄をまつってるほこらだ。そこが気になってな……まあ行けば分かるだろ」
「何が分かるっての？」
「生け贄の隠された条件だ」
儀式をぶち壊せるかもしれない、それ。
そう言われては芹沢も頷かざるをえない。
２人は後ろ髪を引かれながらも、書斎を後にした。

※※※※※

「本日は茶道と花道を手ならいしていただきます」
「……そのたびに毎回着なきゃいけませんか、コレ」
やしろに着いた霊幻は、おそらく昔は社務所だった隣の日本家屋でまたおば様達に洗われて、白無垢を着せられていた。浣腸もされているのでぐったりしていたが、その少し気怠げな雰囲気が、なんとも言えない色気を醸し出していた。
昨晩と同じように、目元と口元に紅を差されている。

それがまた、霊幻の白い肌によく似合っていて、たまらない、と茂夫はそっと唾を飲んだ。
「花嫁修行ですので」
「はぁ」
霊幻は黒留袖の老婆に手を引かれて、簡易的な茶室に連れて行かれる。
「真似をしてくださいませ」
老婆が淹れる抹茶を、そつなく真似する霊幻。
茶道独特のピリっとした清浄さに、ついてきた茂夫の背筋も自然と伸びていく。
が、霊幻がお湯を汲む時に袖を押さえる仕草にドキっとしてからは、その事ばかり考えてしまった。
「お見事です。美しいお点前でした」
老婆が感心したように霊幻に言う。茂夫やエクボから見ても、しゃんとして抹茶を点てる霊幻は凛々しく美しかった。
霊幻というのは、本当に器用な人間である。
「次は花を活けてくださいませ」
また、別の部屋に通される。
そこには白い器に剣山、そして赤い花が置いてあった。
「曼珠沙華でございます。花嫁はこちらを活けるしきたりとなっております」
彼岸花じゃねーか、縁起悪りぃ、とエクボがつぶやいた。
霊幻は居住まいをただして器の前に座り、曼珠沙華を一本手に取る。
その豪華に開いた形をしげしげと眺め、何度か傾けてみてから、ハサミを取って、迷わずシャキン、と茎を半分ほど切り落とした。
それを剣山の中ほどに刺す。
同じようにして花を活けていくのが、どこか儀式めいていると茂夫は思った。
霊幻の指が愛おしそうに花を取り、冷酷にその一部を切り落としていく。
そして切られた花は、白い指が丁寧に針に刺して飾られていくのだ。

霊幻の指から目が離せない。
「完成です」
霊幻がそう宣言するまで、エクボと茂夫はジッと霊幻の手を見てしまっていた。
「お見事です。花道の心得がおありで？」
「いえ、こんな感じかなぁ、と適当に」
まるでそこに生えているかのように活けられた曼珠沙華も、適当と言われたらショックを受けてしまうかもしれない。
本当つくづく、霊幻新隆は器用であった。

老婆と女性のうちの１人が、それぞれ活けた花と点てた抹茶を持ってやしろに入る。
「今日の罠はおそらくヨモツヘグイだな。霊幻、絶対に神域で物を食べるなよ。そちらのモノになっちまう」
エクボが霊幻にささやく。
「ええ？覚えてられっかなぁ……」
「師匠、僕が出した物を絶対に食べないでください。食べたら嫌いになります」
「ひぃっ！？顔が怖いって！分かった、分かったよ！」
続いて霊幻も介添えされながら、やしろに入る。
布団に横たわると、すぐ意識が無くなった。

※※※※※

気がつくと、水車小屋のある川のほとりに立っていた。
森の奥深く、街の姿は見えない。
綺麗な森だ。明るく、木々の緑が眩しい。
それに……
「綺麗な川だな……」
透明度の高い川に、そっと手を差し出した。
「そうかい？照れるねぇ」
「出たな荒潮川」
「……『モブ』、だろう？君が付けてくれた名だ」

ああ、今日も、龍神の瞳が光って──。
……。
「ししょう、見てください。私たちの新居ですよ」
「何をとち狂ったこと言ってんだ、モブ」
「気に入ってくれるといいのですが」
「おい話をきけ」
俺は困惑する。俺たちは別れたはずだ。モブは何を言っている？
「ししょう、『霊幻』、私たちは『よりを戻した』んです」
よりを、戻した……？
ああ、そうだったかな……。

いや。

「そんなはずはない」
ビキィ、と左手の石の指輪にヒビが入った。
「俺がそれを了承するはずがない」
パラパラ、と指輪が崩れ落ちそうになる。
「……」
モブは困ったように笑って、指輪に向かって手をかざした。指輪はほぼ元通りになったが、ヒビは消えなかった。
「まぁまぁ、せっかくだから見ていってくださいよ。こちらですよ、『霊幻』」
足、が、勝手、に。
モブが俺の手を引いて水車小屋の中に連れ込む。
……中は巨大な日本家屋だった。どうなってやがる？超能力か？
「ここは春の部屋。夏の部屋」
部屋ごとに季節が違う。おかしな家だな……。
「ここは、秋の部屋」
その紅葉した庭に面した部屋には、俺が活けた花が飾られていた。抹茶も置いてある。
「ししょうは本当に多才だね。あの花、とても気に入ったよ」
「……適当に刺しただけだぞ」
「さあ、『霊幻』、『疲れた』でしょう」

言われると、どっと疲れを感じる。
モブに促されるまま、抹茶の前の座布団に正座した。
「一服どうぞ」
喉も渇いた。
抹茶はとても美味しそうだ。
でも。
「これを飲んじゃいけねぇんだろ」
「……どうして？」
「お前が言ったんだろ、モブ。出した物を飲んだら、嫌いになる、って」
ビキリ。モブのこめかみに青筋が走る。
別れてもさぁ、お前に嫌われたくないんだよ、モブ。ごめんな。

『ししょう！！』

ふわ、と目が開いた。

※※※※※

「今日はだいぶ時間がかかりましたね、大丈夫ですか？」
霊幻の冷たくなってきていた手を握りながら、心配そうに茂夫は顔を覗き込む。
「おぉ……なんか、頭がふわふわすんな」
「ヨモツヘグイはしてないだろうな？」
「してない……と思う。ん……？」
霊幻は左手の石の指輪にヒビが入ってるのに気がつく。
「何だコレ？」
「でかしたな霊幻！少し神気が弱まってるぞ！」
「そうなのか……？」
喜ぶエクボをぼんやり見つつ、霊幻は不思議そうに指輪をいじっていた。
「あ、そうだモブ。親御さんに遅くなるって言ってあるんだろ？」
俺んチ来いよ。

ひそ、と霊幻が茂夫に耳打ちする。
「えっ」
期待と困惑が混じった声で茂夫が返す。
だがゆるゆると頷いた。

茂夫は少し、霊幻に話があったからだ。

※※※※※

「俺のアパートなら、神域ほど神様の力が強くないだろ？だから、デキるんじゃないかと思ってな」
霊幻がスーツを脱いでいく。
フワリと麝香の匂いが茂夫を刺激した。
シャツのボタンを外した所で、下着と靴下を残したまま霊幻は手を止める。
「これぐらいは……脱がしてみたいか？」
ごくりと茂夫の喉が鳴る。
「……はい」
むしろ、脱がさずに。
茂夫はひたりと手のひらで霊幻の心臓の上を触り、その手を脇腹に滑らせた。
「あ」
急所に触られた霊幻が不随意の声を上げる。
それが妙に甘やかで。
茂夫は既に興奮を兆していた霊幻自身に触れようとした。
が。
「……ッ」
バチバチと電流のようなものに阻まれる。
ただ、やしろの中程強くない。茂夫が力を込めると、神様の加護は霧散した。
「……溶かせたのか？」
「ええ、少し大変でしたが」
「じゃ、ヤろうぜ」

「……」
どこか軽薄に振る舞うのは、霊幻の照れ隠しだった。
真っ赤になっている耳を愛おしく思いながら、茂夫は霊幻の下着を取り払う。
知識としてはどうやるのか知っていた。
「えーっと、ローション……」
それは霊幻も同じだ。
だからこそ。茂夫は大きな不安に襲われていた。

──詰めが甘い、んだよな、この人。

指にローションを絡めて、茂夫は霊幻の後口に触れる。
そろり、と指を入れると。
「ゔ……っ！」
霊幻は吐き気に思わず口を手で抑えた。
「そんな、なんで……っ！？ゔぇ……ッ！」
「……内臓を触ってるんですよ？気持ち悪かったりして当然でしょうが」
「もういい、モブ、もういいから、挿れて……ッ！」
ぴた、と動きを止めて。
怒りを込めた目で、茂夫は霊幻を睨みつけてやった。
「アンタ僕のことをなんだと思ってるんだ」
「モブ……？」
「アンタと付き合ったのは、セックスがしたいからだとでも思ってるんでしょうね」
「……！！」
ぐるり。モブが指を回すと、おぇっ、と霊幻がえづいた。
「こんなの、何日もかけて慣らすものでしょう。師匠、処女なんだから」
「しょ……なんで、知って、ゔっ、」
「この有り様で経験者だと思えたら相当目出度い頭してますよ」
はぁっ、と生理的な涙を浮かべた霊幻が息をつく。
「ご、ごめんな、めんどくさくて、ごほっ、」

「ハァ！？！？！？！？何言ってんですか嬉しいに決まってるでしょ。だから身体目的の性欲オバケみたいに言うのやめてくださいって」
「……？なら、良かった……？」
「ともかく、こんな状態でヤるなんて無理ですよ。下手すると切れちゃう」
そ、と霊幻が茂夫の頬に震える手で触れる。
「切れても、いいから……気にするな……」
「……いいワケないでしょうが！！」
茂夫は指を２本に増やし、ズブリと突き入れた。
「……ッオエえぇ……ッ！！」
霊幻が手で口を抑えたがそんなものでは封じ込めず、びしゃびしゃびしゃ、と霊幻はベッドに嘔吐してしまった。
「指２本で吐いてて、ちんちん挿れたらどうなるんですか、アンタ」
「ごべんな……ごべんなざい゛……」
「ッ、僕はこんなことがしたいんじゃない！」
「そうだよな……ごめんな……」
「いやしたくはあるけど！」
「そうなの！？」
「でも鬼畜じゃないので、普通にゆっくり師匠を開発したいですし、その、」
また嘔吐反射を起こさないように気をつけながら茂夫は指を抜いていく。
「青少年保護育成条例ってご存知ですか」

場が凍った。

「うんまぁその……聞いたことあるような……」
「師匠が知らないはずないですよね。同意の上であっても未成年と寝ると、大人が処罰される法律です」
「法律じゃなくて条例だろ」
「語るに落ちてるの分かってます？」

「……それがどうしたんだよ」
茂夫が指を抜き切り、落ち着いてきた霊幻が口をぬぐいながら返す。
「師匠、師匠は僕と別れる口実にセックスをしようとしてますね？」
見抜かれた。
そう悟った霊幻は黙り込む。
同じく黙った茂夫は黙々と吐瀉物を片付けはじめていた。
「……そうじゃねぇよ。ただセックスしたいだけだ」
「嘘ですね。指２本で吐いた人が何言ってるんですか」
「いやまさか吐くとは思ってなくて……」
「師匠がそのつもりなら、僕セックスしませんよ」
「は！？なら別れるのか？」
「だからなんで付き合うイコールセックスなんですかアンタは。そんなのだから童貞処女なんですよ」
「なんで知って……！？」
「ほんとだったのか……」
「なっおまえカマかけて……！」
「とにかく。セックスはしません」
このかなり頑張って我慢した茂夫の宣言に。
（ああ、なら飽きるのも早いだろうな）
としか思わなかった霊幻は、少し寂しそうに微笑んだ。

続